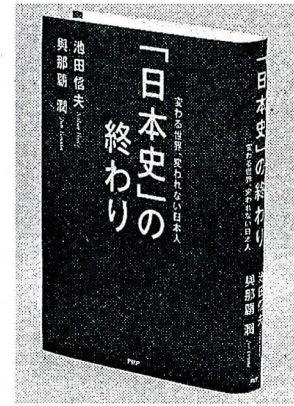


「日本史」の終わり 変わる世界、変わらない日本人 池田信夫、與那覇潤著

中国を基準に問い直す



(PHP研究所・1680円)

いけだ・のぶお アゴラ研究所所長。よなは・じゅん 愛知県立大学准教授。

経済学と歴史学の知見を生かしたユニークな日本論である。結果よりも動機を重視する「動機の純粋性」、「拒否権プレイヤー」の多い全会一致型社会、「場の共有」を通じたタテ社会の人間関係といった日本社会を支えてきた規範が綻び始めたという認識が、書名に端的に示されている。それを踏まえ、著者たちは世界を捉える基準として、お馴染みの西洋ではなく中国を提示する。

本書は、行動経済学を参照しながら、人間の思考を直感や感情などの「システム1」と推論や論理などの「システム2」に分類する。西洋では凄惨な宗教戦争や大虐殺が繰り返された結果、感情や憎悪といったシステム1の暴走を抑止するために社会契約や法治国家などのシステム2が重視された。感情を論理によって制御するという知恵である。一方、西洋のような宗教対立や国家間の大戦争が少なかったアジアではシステム2は発達せず、システム1への信頼が温存されたと著者たちは語る。その典型が中国である。西洋のように民主化すれば価値が多元化するとは限らない。むしろ社会の思想が画一化され不寛容になっていく可能性もある。あえて共通認識を作らずに解釈の幅を持たせ、人間関係の中で問題を解決することも成熟した社会には必要という指摘は、示唆に富んでいる。

日本はどうか。建前としては「法治国家」だが、実態は「人間関係」の統治であると著者たちは考える。契約やルールを通じた「法の支配」よりも、評判や信用を通じた人間関係が社会を基礎付けているのである。人間関係はネットワーク状に広がっているが、意思決定は全員一致で動きが鈍い。しかも一度決まったら簡単には変えられない。西洋と中国、両者の欠陥を兼ね備えたシステムになっているという警告は重い。

高度成長期には東西の文明を見事に調和させた日本の成功がもてはやされた。だが、時代は変わった。政策や行政など組織文化の弊害が強く現れ、変えられない日本の政治が問い直されている今こそ、求められる一冊であろう。(九州大准教授・政治学 大賀哲)